

まえがき

Preface

われわれ筆者は、ある明確な意図をもって本書を書いた。われわれは皆、調査方法論研究者である。“調査法研究 (survey research)” という、さまざまなデータ収集および分析にかかわる活動について、その理論と実務に従事してきた。調査が今日のような形で認められるようになったのは、およそ 60~80 年前のことである。そして、過去 20 年以上にわたって、一連の理論と原則が発展してきたことで、調査の設計、実施、評価についての統一的な考え方を提供してきた。この考え方を一般に“総調査誤差 (total survey error)” パラダイムとよんでいる。この枠組みは、調査品質に関する最新の研究の指針を与えると同時に、調査専門家がいかに実践的に業務に取り組むかの具体的な姿を示すものである。そのようなことで、この研究領域から生まれた分野は“サーベイ・メソドロギー (調査方法論, survey methodology)” とよぶのがふさわしい。

しかし、調査のことにふれたテキストと、調査の科学がどのように発展してきたかとの間にみられる食い違いが次第にわかってきた。多くの調査研究テキストでは、ツールとしての応用面に焦点を当てていて、こうしたツールの根底にある理論や科学性が重要だと考えてはこなかった。多くのテキストが学生たちに行うように教えてきたことは、この分野の方法論研究ではもはや支持されなくなったこととか、これまでに一度も支持されていなかったことであった。つまり、調査を「いかに行うか」にこだわるあまり、実はよく理解し尊重すべき、実務の根底をなす科学性を軽視したテキストがたくさんあったということである。

われわれがとくに有害であると考えたことは、こうしたテキストが読者に誤った考え方を広めかねないということであった。それは、調査とは単なるレシピのような作業、つまり指示に従って順に進めれば高い品質が約束されるのだ、という誤解である。これとは異なり、われわれが考える調査とは、ある特定の目標母集団にたいして、ある特定の現実の目的に合わせた独自の方法で原則を実践を必要とするものであった。

われわれにとって、こうした問題がとくに重要となったのは、「調査方法論共同プログラム」(JPSM: Joint Program in Survey Methodology) の一環として、1 学期相当の大学院 (および学部シニア) 向けコースを開設することになったときであった。JPSM は、連邦政府の統計機関 (Federal statistical agencies) の資金援助を受けている共同大学院プログラムであり、われわれ筆者たちはそこで教鞭をとっている。このコースの受講者は、多くの場合、他の分野 (たとえば、経済学、統計学、心理学)

の高度な教育を受けてはいるが、調査方法論を正式に学んだことはない。そこでわれわれは、演習と試験を含む14週間の講義コースを計画した。その第1弾を1998年の秋に予定したのだが、この時点ですぐに、講義で使えるテキスト、演習の動機づけに役立つテキストがまったくないという問題に直面することになった。

そこでわれわれはまず、理想的なテキストとはどのようなものかをじっくりと考えることから始めることにした。それは、過去の方法論研究でわかってきた調査設計の基本原則を述べるテキストである。その基本原則が提供する指針、つまり品質のすぐれた調査を行うときに必要な意思決定に役立つ指針を説明するテキストである。またテキストには、この分野を統一的に理解する手助けとなる演習も含めたかった。このテキストでわれわれが伝えたかったことは、この分野は実験で得た成果やその他の研究成果にもとづいているということであった。しかも実用的な調査設計とは、単なる見解や意見の問題であるだけでなく、むしろ多くの研究成果を集めた結果だということである。

本書の下書きの執筆には数年間かかったが、それは初めの2つの章を書いたところで休眠状態に陥ってしまったせいでもある。この状態から抜け出すことができたのは、ひとえに同僚のナンシー・マシオヴェッツ (Nancy Mathiowetz) による激励のおかげである。われわれの背中を再び押ししてくれた彼女の行動力に感謝している。

また、受講者たちの批評からも多くの恩恵を得ている。2003年の夏に、ミシガン大学調査研究センター (SRC: Survey Research Center) の「調査研究技法夏期講習 (Summer Institute in Survey Research Techniques)」で、マリア・クリサンとスー・エレン・ハンセンの2人が教鞭をとった「調査研究技法入門」(Introduction to Survey Research Techniques) のクラスで、リハーサルの目的で、この本の草稿が使用された。原稿の改善を助けてくれた両講師に対してここで感謝の意を表したい。またクリサンとハンセンだけでなく、このクラスの受講者たち (ナイキ・アディバディ、ジュニファー・パウアーズ、スコット・コンプトン、サンジャイ・クマール、ダミル・ムクワナジ、ハン・マラー、ヴェエルワ・ンカンブレ、ローレル・パーク、アロン・ラッセル、ダニエル・シュピース、キャサリン・スタック、キミコ・タナカ、ダン・ヴィエット・フォン、クリストファー・ウェブ) が寄せてくれた批判やアイデアから沢山の得るものがあった。

またこの本は、われわれの指導者であった多くの人々から学んだ教訓をしっかりと反映した内容となっている。とくにふれておかなければならない人がチャールズ・カネル (Charles F. Cannel) である。われわれ筆者の全員が (公式あるいは非公式の違いはあっても) 彼の友人であり、また生徒であった。調査分野におけるカネルの経歴は、レンシス・リッカート (Rensis Likert) とともに、米国農務省計画調査局 (Department of Agriculture, Division of Program Surveys) ではじまった。カネルはその後1946年になって、リッカートらとミシガン大学調査研究センター (SRC) を設立する。カネルは当センターの実査部門の初代部長を務め、また調査方法論について長

年にわたり優れた業績をあげた。SRCを含む上位機構である社会調査研究所（ISR：Institute for Social Research）により、チャーリーと彼の研究業績を記念してチャールズ・カネル基金が創設された。本書の売り上げから得られる利益はすべてこの基金に贈られることになっている。基金からの寄付金は、調査方法論の研究歴を伸ばしつつある若手研究者の支援に充てられており、これに勝る適切な使い方はないだろう。

われわれはこのテキストを、統計学コースをいくつか受けたことのある受講者を対象としたクラスで使うことを想定して用意した。受講者に求められるおまな予備知識は、統計的記法を読みとる力で、そこには総和記号や期待値の記法、和を表す数量の簡単な代数演算などが含まれる。また、いくつかの章では、回帰モデルやロジスティック回帰モデルを使った定量分析にもふれている。したがって、線形モデルをよく知らない受講者は、こうした分析結果を理解するために、なにがしかの助けが必要となるだろう。

本書は全体で12章からなりたっている。章の順番は、われわれがJPSMで行った調査方法論の学期コース「調査方法論の基礎」(Fundamental of Survey Methodology)と同じ順である。本書をテキストとして用いる講師は、各章で引用している論文などを副読本として指定するのもよいだろう。

初めの「調査方法論入門」と「調査における推論と誤差」の2つの章は、本質的には概念的な内容である。第1章で紹介する6つの調査事例は、さまざまな原則と実践を例示するために本書の随所で取り上げている。この本を補う意味で、こうした調査事例のウェブページを教室で見せて、調査の設計上の主要な特性や成果物についてクラス内で議論させることも有効だろう。

第2章では、総調査誤差パラダイムの主要な要素を取り上げている。実は、われわれの経験では、講義クラスの初めの段階で、調査事例を通じて主要な誤差要素の例を紹介することが受講者の理解に役立つことがわかってきた。われわれが考える調査になくてはならない特徴とは、調査が母集団の統計的記述を提供するように設計されている、ということである。確かに統計量を求めるコンピュータ・プログラムはあるのだが、調査法研究者はこうした統計量の基礎となる計算方法を理解することが肝要である。したがってこの本では、何を算出すべきかの概念的な議論に加えて、統計的な記法にも必ずふれるようにしている。

また第2章は、統計的な記法を扱うよい機会になるだろう。こうした記法を一度学んでおけば、本書の残りの部分も受講者にとって取り組みやすいものになるはずである。

第3章「目標母集団、標本抽出枠、カバレッジ誤差」からあとの各章では、総調査誤差の個々の要素と、優れた実践の指針となるような方法論研究のさまざまな成果を扱っている。これらの章では、調査研究における優れた実践例にもとづく研究に、意図的に焦点を当てている。われわれは、受講生がある展望をもって調査方法論の研究をはじめること常々気づいてはいた。その展望とは、ある具体的な調査設計の特性

に関する受講生のもの見方は、こうした優れた実践例を判断の手がかりとしていることである。第3章から第11章で扱う題材の役割は、こうした優れた実践例を特徴づける調査手法についての科学研究が存在することを示すこと、つまり、もの見方とは、研究にもとづいていない限りほとんど価値がないことを示すことである。こうした研究の中には、直感的に理解できるほど自明な研究成果のないものもある。したがって、この分野の学生は、過去の方法論の文献をあらためて検討するとともに、適切な調査設計を見出すために、ときには斬新な研究を行う必要がある。この本には、この分野のこうした考え方を伝えるために役立つと思われる工夫を2つほど仕組んである。1つは、議論の対象となった研究の参考文献を組み入れたことである。もう1つは、コラムを設け、その章で取り上げた領域の古典的な研究の具体例を簡潔に説明したことである。こうしたコラムでは、研究計画、研究の成果、制約事項、その研究の影響力を要約として説明している。こうした研究の全文は、この本を読み解く副読本として活用できるだけでなく、講義クラスにおける討論材料としても使えるだろう。また、各章の終わりには、われわれが薦める追加文献の一覧も掲載してある。

第4章「標本設計と標本誤差」は、他の章に比べて、統計的な記法を使った内容となっている。なおここで、統計的記法の解釈と理解に補講を必要とする受講者が多いときには、カールトン著の小冊子「標本抽出法入門 (Introduction to Survey Sampling)」(Sage, 1983)を受講者に薦めてきた。なお、このコースのいくつかの回では、カバレッジと標本抽出の章に3週間を充てている。

第5章から第10章はそれぞれ、通常のコースであれば1週間で履修できる内容となっている。これまでの経験では、カバレッジ誤差と無回答誤差を表す数式の類似点を重視するとよいという結果がでている。われわれはまた、標本集落化効果と調査員変動(つまり調査員が原因の全変動)の2つに対して、どのように級内相関の基本原則を適用するかも重視するようにした。

第11章「調査研究における倫理の科学的公正性」は、感受性訓練を取り上げるだけでなく、調査対象者を倫理的に扱うための基礎となる概念的枠組みと、調査データの開示分析に関する最近の理論と応用も含めるという理由で取り上げている。ここでもまた、判断力だけでなく倫理的課題にかかわる意思決定に、調査研究がどのように関連するかを述べている。

第12章「調査方法論に関するよくある質問と回答」は、他とはかなり違う形式で書いてある。われわれのコースでは、慣例として最終試験に先立つ検討会で、自由討論方式の質疑応答コーナーを設けている。このとき、受講生から出てくる質問は、受講生が具体的な授業で学んだことを、さらに広い自らの世界観と統合する試みである、ということにわれわれは気づいた。そのため本章では、こうした包括的な事柄を含む質問に対してわれわれが回答を与えるというFAQ形式(よくある質問とそれへの回答)としてみた。

セーラ・ディブコとソニア・ジニールの両名の編集者としての適切な判断力のおか

げで、原稿は大幅に改善された。図版と表の作成は、アダム・ケリーがコンピュータ処理を使って手助けしてくれた。Wiley社のリサ・ヴァンホーンは、編集者の介入が必要なときでも不要なときでも、一貫して調整役としての優れたビジネス・センスを発揮する出版編集主幹であった。これらの方々に感謝したい。

重要な研究領域についての意見を集めて、整理し、調査方法論の楽しさを知識領域の一分野としてどのように伝えるかを議論しながら進めた本書の執筆は、非常に楽しい作業であった。読者の方々もわれわれと同じように、大いに楽しんでいただければ幸いである。

2004年3月

ロバート・M・グローヴス（ミシガン州，アナーバー）
フロイド・J・ファウラー Jr.（マサチューセッツ州，ボストン）
ミック・P・クーパー（ミシガン州，アナーバー）
ジェームズ・M・レプカウスキー（ミシガン州，アナーバー）
エレノア・シンガー（ミシガン州，アナーバー）
ロジャー・トゥランジョー（メリーランド州，カレッジパーク）